

近代中国における「真言宗」の伝来について

The Introduction of “Shingon Buddhism” in Modern China

WEI Jie

章

傑

概 要

20 世紀初頭に日本の真言宗が中国に伝わり、多くの中国人仏教者が密教を学ぶために日本に渡り、彼らによって中国で密教ブームが引き起こされた。

一方、日本真言宗は 1915 以降から正式に中国で布教活動を行い、真言宗を中国に伝えようとした。日本側の「布教」と中国側の「回流」、「復興」はいずれにしても密教を日本から中国へと伝わる行為を指すが、実際には全く違う方向性であった。本稿ではこのような問題について考察を試みた。

キーワード：近代中国、真言宗、布教、回流

Abstract

In the early 20th century, Shingon Buddhism was introduced from Japan to China, and it induced many Chinese people to go to Japan to study Esoteric Buddhism, which triggered the revival of Esoteric Buddhism, representing a case unique to modern China.

On the other hand, Shingon Buddhism of Japan has officially begun missionary activities after 1915, tried to bring back Shingon Buddhism. Although “Mission” in Japan, “Return” and “Revival” in China refer the same way of bringing Esoteric Buddhism back to China, I consider those two are totally different. Therefore, this paper aims to clarify the differences, attempts to investigate, and figure out the problems caused by bring back Shingon Buddhism to China.

Key words : Modern China, Shingon Buddhism, Mission Return

1. 序 論

20 世紀初頭に中国に密教ブームと言われる現象が現れた。1920 年代にブームの頂点に達し、その後次第に収まった。また当時中国で流行って

いた密教には日本由来の真言宗（東密）とチベットから伝わった所謂チベット密教（蔵密）の二種類がある。1910 年代から 1930 年代まで流行ったのは主に真言宗であり、1930 年代以降はチベット密教となった。

また、中国における真言宗の伝播についてその

方法は、主に二つに分けられると筆者は考える。一つは中国人仏教者が日本から持ち帰り、広めたものであり、もう一つは日本人密教者による直接布教によるものである。いずれにしても日本から中国へ、という方向性が共通しているが、しかし、その内容から見れば千差万別だと言えよう。両方が使う言葉からもその相違が示されている。まず、中国側は日本から密教を持ち帰ることに對してよく「回流」、「復興」という言葉を使っている。つまり、中国の密教は唐代から次第に衰えていったが、空海が日本に持ち帰ったため、現在でも日本にその唐代密教（唐密）が受け継がれていると理解される。従って、日本密教を持ち帰ることは、中国密教の復興に直接つながると当時の中国仏教者が考えた。一方日本側が使う「布教」、「開教」は日本真言宗の密教における正統性の見方が反映されている。1920年代、日本の密教者が中国人求法者に対して資金の援助や短期集中講義など積極的に対応していたが、結果として彼らが帰国後の言論、主張を見て失望してしまったのがほとんどであった。

この二つのルートはどのような関連性があるのか、また、どのような違いがあるのかについてまだ未解明な点が多く存在している。本稿では真言宗の中国伝播について取り上げ、中国人密教者による「密教回流」と日本人密教者による「真言宗布教」との二つの方向性で当時中国の「真言宗」伝来について考察したい。

2. 近代中国の密教ブーム

2-1. 太虚の密教復興理論

1895年の日清戦争における清帝国の敗北が、朝廷及び中国人の危機意識を引き起こした。1898年から清朝では、近代化革命を目指す「戊戌の変法」が行われた。この時期に多くの中国人が日本に留学し、大量の日本語書籍が漢訳された。その中、日本の仏教学者による書籍が中国仏教者に大きな影響を及ぼした。さらに清朝末期から民国初期にかけて行われていた廟産興学運動により、学校建設の理由で数多くの寺院は政府に財産が没収された。それによって仏教が大きな打撃を受けた。この廟産興学運動が直接に中国仏教改革運動

を促したのである。

当時の中国仏教を様々な窮境から乗り越えさせようとした太虚は、中国仏教の改革を図った。彼は、仏教改革にも多大なる力を注いだ重要な人物である。太虚は中国仏教改革理念を唱え出したのは1917年『整理僧伽制度論』の発表からである。太虚は日本、台湾、東南アジアの仏教を実際に考察した上で、1914年から1917年にかけての四年間に普陀山にて著した。彼は僧団の建立、八宗復興、佛教大学の建立、僧伽教育、仏教伝道など様々な制度を図った。『整理僧伽制度論』には中国仏教を南山宗（律）、少室宗（禪）、開元宗（真言）、廬山宗（浄土）、慈恩宗（法相）、嘉祥宗（三論）、天台宗、清涼宗（華嚴）と八つの宗派に分けてある。その中、開元宗については、以下のように論述されている。

唐開元四年（筆者注：716年）、善無畏三蔵が密教經典を持って長安に至り、密教經典を漢訳した。一行大師は善無畏三蔵の全てを受け継いだ。同時に、金剛智三蔵も弟子の不空を連れて唐に來た。密教は龍猛菩薩が南天竺鐵塔を開いて、金剛薩埵から灌頂と儀軌を受けてから、この世に伝わったのである。龍猛が密教を龍智に伝授し、金剛智は龍智から密教の真髓を得たのである。善無畏も龍智の弟子であり、金剛智、不空と共に開元三大士と呼ばれる。当時、三人がお互いを仏として尊んでいた。この宗は月日が世を照らすように流行したが、消滅してまった。志磐法師は『佛祖統記』で既に唐末の乱（筆者注：会昌法難）によって經典が全部焼却されたと述べている。現在密教は日本で盛んになっているが。我が国に現存する所謂瑜伽（筆者注：密教）はただ法事が残しているのみである。宋の時代に既に民間に流行する歌のようなものになっていた。元、明、清に至り、密教は宮中では行われたが、モンゴル、チベットのラマ教は開元密教が復興したものではない。日本のみに唐密の法が残っており、それを受けて帰れば、密教の復興が可能になる。¹

ここには、中国密教の歴史を紹介するほかに、

それを復興するための方法論も記述されている。即ち真言宗を中国に持ち帰れば、中国密教を復興することが可能であるということであり、その発想は中国密教復興運動の思想基盤となった。

2-2. 密教雑誌の創刊潮

太虚の密教復興に対する貢献はまた、仏教雑誌『海潮音』²の創刊がある。『海潮音』の第1期には殷人庵居士が著した密教論文『一字金輪陀羅尼略弁』を収録した。2期から9期の「密宗研究專號」に王弘願居士の訳した『密宗綱要』³を紹介した。密教復興運動は太虚とその『海潮音』に推し進められ、社会的注目を集め、ブームを迎えた。『海潮音』の創刊後、密教専門雑誌が相継ぎ創刊された。そのリストは以下の通りである。

- 1920『海潮音』密宗研究專號
- 1925『佛化季刊』乙丑夏季
- 1926『天津金光明法會特刊』
- 1926『密教講習錄（王弘願翻譯自權田雷斧之「密宗綱要」）』1926-1935
- 1928『息災專刊』
- 1930『威音（顧淨緣創立）』1930-1937
- 1931『西南和平法會特刊』
- 1932『解行精舍第一次特刊』
- 1933『海潮音』密宗問題專號
- 1934『密教講習錄』（讀『海潮音』密宗問題專號）
- 1934『世燈』（1-4期）
- 1934『中日密教』
- 1936『佛學半月刊』丙子息災法會特刊
- 1937『佛海燈』紀念超一專號
- 1938『四川佛教月刊』護國息災特刊
- 1941『弘法大師紀念特刊』
- 1942『佛學半月刊』真言宗專號（1-2）
- 1949『乙丑度亡利生息災法會音聲』

中国における密教ブームは上記の雑誌の宣伝に欠かせないと言えよう。密教の宣伝だけでなく、密教者が教義に対する交流、議論の場でもある。しかし、1949年以降はほぼ全部廃刊となり、『海潮音』だけが現在でも台湾で刊行されている。

3. 中国人密教者による「密教回流」

3-1. 持松

持松は俗名張旃林、法名密林、號持松、灌頂密号入入金剛。湖北省荊門市出身。18歳に、鉄牛寺にて出家し、20歳の頃漢陽の帰元寺にて具足戒を受けた。同年、哈同花園華嚴大学に入学。中華民國4年（1915年）日本政府の「対華21ヶ条要求」内容の一つ『中国において日本人の布教権を認めること』に注目した。後に「法輪宝懺」を読んで、密教の奥深さに興味を持った「爾時即慾東往、一探究竟」。1922年、彼は釈大勇、釈純密と共に日本高野山へ渡った。真言宗天徳院の金山穆昭から密教を学び、古義真言宗中院流血脈を得て、64世伝法阿闍梨位が授けられた。1923年中国へ戻り、中国で密教を広めた。1925年二度目の日本求法として真言宗豊山派多門院の権田雷斧の元で新義真言宗を学び、49世伝法阿闍梨位を得た。同年の4月、比叡山延暦寺にて台密を学んだ。後に再び高野山へ行って金山穆昭から三寶院流灌頂を受けて、悉曇文を学んだ。1927年帰国した持松は密教の広めに専念しながら、『密教通関』、『金剛界行法記』、『胎藏界行法記』、『護行法記』、『悉曇入門』など重要な著作を記した。密教真言宗集大成者、伝法大阿闍梨、唐密復興初祖と仰がれる持松の生涯において三回の渡日があった。求法を目的としたのは1923年の一回目と1925-1926の二回目である。

1923年1月（太陰暦では1922年11月末）、太虚の弟子である釈大勇、釈純密と同行し、初めて日本に渡った。高野山天徳院の住職である金山穆昭阿闍梨の元で密教を学んだ。

四度加行を終了後、金山から伝法灌頂を受け、古義真言宗中院流の法脈を得て、伝法阿闍梨位が授けられた。1923年9月に、資金の問題で密教経典、儀軌そして『弘法大師全集』などの貴重な書籍並びに、仏画、法具と大蔵經一部を持って帰国した。その中に中国ですでに断絶したものと日本密教者の経論など貴重な書籍が多く含まれている。

1925年10月28日、東京で開かれる東亜佛教大会に参加するため、日本に向けて出発した。

11月4日から中華佛教代表团と東京、名古屋、京都、奈良、大阪、神戸などを視察した。太虚らは11月21日に神戸から中国へ帰国したが、持松は引き続き密教を学習することと決意し、そのまま日本に残っていた。まず新潟県に行つて権田の元で新義真言宗を勉強した。翌年春、権田から印可をもらい、遂に多門院に金胎両部伝法灌頂を受け、新義真言宗伝法院流伝法阿闍梨位が授けられた。権田と別れた後、比叡山延暦寺に行つて台密を学習した。天台教学について既に熟知したため、素早く学業を終えたという。後に再び高野山へ向かい、金山の元でサンスクリット文法、悉曇文を勉強した。さらに金山から三宝院流法脈を相承し、安祥寺流口伝を得た。ここから古義真言宗と新義真言宗、天台密教を学習でき、古義真言宗中院流、三宝院流、新義真言宗伝法院流の法脈を受け継ぎ、三つの伝法阿闍梨位を得た。中国ではもちろん、日本でも極めて希有なことである。

3-2. 王弘願

中国密教復興史には初めて系統的に密教を日本から中国へ紹介したのは在家信者の王弘願である。王は広東省潮安市出身であり、独学で日本語を学習した。1918年、当時豊山大学（現在、大正大学）学長、真言宗豊山派管長であった権田雷斧の『密宗綱要』を翻訳し、出版した。それをきっかけに王は太虚の支持を得た。また、『密宗綱要』は初めて日本密教を紹介する著作として、後の密教復興活動に対する直接な影響を与えた。1920年、王は権田雷斧の『曼荼羅通解』を翻訳し、仏教雑誌『海潮音』で連載した。

1924年、王の誘いに応じて、権田雷斧は小林正盛、小野塚興澄、大橋伝正と12人が台湾を経由して広東の汕頭に至った。開元寺で特別に居士身分の王弘願と僧侶である慧剛、純密、一道、妙慧、自若に伝法灌頂を行った。ほかにはまた120人余りに結縁灌頂を行った。灌頂後、権田は伝法法具、密教法具、両部曼荼羅を王に贈与した。王はそれをきっかけに広東省潮安市で、密教復興を目的として「震旦密教復興会」を結成した。1926年権田の申請により、日本政府は王の日本留学の資金を援助した。これまで王は密教に関する見解を多く発表したが、自習で習得したため、系統的

に密教を勉強する機会を得たのである。王は権田から伝法阿闍梨位が授けられた。帰国した王は潮安で密教壇場を設け、密教教学を始めた。さらに、潮州、広州、香港、マカオにも灌頂を行い、仏教界では多くの注目を浴びた。1933年まで、王から灌頂を受けた人数はすでに千人以上に達しているという記録が残っている。中国の東南地区ではかなり影響力を持った。しかし、居士身分で阿闍梨として僧侶に灌頂を授けることは中国仏教各宗派また、同じ密教内部からの批判が猛烈に殺到した。王を支持した太虚は態度が一変し、「邪見」と批判した。さらに、王の日本的仏教観は中国仏教との間に大きな反発を受けた。

3-3. 密教教義論戦一日中仏教思想間の摩擦

王弘願を支持した太虚は、王の女人成仏説を主張する態度が示した以降、王に対して深く批判をした。太虚は、女人成仏説は「日本の法華宗の論者が無理矢理に附会する」説であると主張し、王弘願とその居士派を「奴児弘法（空海の奴隷）」、「婢子日蓮（日蓮の召使）」だと指摘し、日本仏教が中国仏教にもたらした影響していると警告している。のちに、王の阿闍梨位にめぐる大きな論争が太虚派と居士派との間に生じた。

1926年、王は日本留学中に権田雷斧から新義真言宗伝法院流第四十九世伝法阿闍梨位を受けた。当時日本留学中の太虚派密教僧侶、顕蔭は王に手紙を送った。手紙の内容には「此誠為祖國佛教前途之大慶也」と祝辞を述べたが、「惟白衣傳法、古無其例」と王の在家者の身分で伝法灌頂を受けることを指摘した。反論として王は唐代の雲海という阿闍梨の記録を引用し、すでに唐代には在家者に対する密教の伝法灌頂が行われていると主張している。王は権田雷斧の伝法には①在家者が続出すれば中国で密教が栄える。②經典を見ても阿闍梨は僧侶に限定されていないという二つの根拠を言い出した。太虚は「邪見」と王を批判し、さらに王の伝法師である権田雷斧まで

雷斧といった輩は荒誕な伝法灌頂をし、完全に仏教戒律を背いている。そして、その荒誕な行為は日本真言宗の規制にも違背している。我が国の名利を追求する輩はかえって雷

斧の行為を真似する。居士の身分で極めて短時間内に両部の大法を受けることはまさに荒誕の極みだ。(宿蔵雷斧輩傳密之荒唐、匪特佛律祖規大相徑庭、且與彼國日本傳密之通制、亦大相違背。而吾國對佛法顛預僞侗名利之輩、卻轉相效仿、居然亦居士身份於極短時間受兩部大法、荒謬亦云甚矣。)⁴

と非難した。太虚は権田雷斧から伝授された密教を「毒」と呼んでおり、王の「外道門戸」が広東省から江蘇省まで普及していることを嘆いた。王と共に権田雷斧から伝法灌頂を受けた曼珠も『海潮音』で王の活動を批判する文章を発表した。日本人の母を持つ曼殊は日本とチベットの密教は「無窮の流弊」を生み出すと主張した。王の阿闍梨位の論争については太虚の弟子である大勇が1935年金山穆韶に尋ねた。大勇は王の居士身分で伝法灌頂を受けることができるかどうかを金山穆韶に聞いた。金山穆韶は「できない」と答えた。さらに大勇は伝法灌頂を受ける資格について聞いた。金山穆韶は「密教灌頂には三つの段階があり、結縁灌頂、受明灌頂、伝法灌頂。伝法灌頂を受けるのは出家者しかできず、在家者は結縁灌頂、受明灌頂しか受けることができない。」⁵と明確に言った記録が残っている。そういった伝法灌頂にめぐる論争は1937年、王の没に連れて終わりを告げた。

それ以外にまた顕密教判論争がある。王は日本密教を忠実に基づき、日本真言宗の十住心教判の正統性を主張した。高野山で修行後に帰国した持松が『海潮音』で『賢密教衡』という文章を発表した。持松は密教を仏教の一部だと位置づけ、密教と華嚴の融合主張を説いた。さらに持松は空海が著した『十住心論』の十住心教判を非難し、「亦吾之所以尊師尊祖之所宗者、令去其十住心教之小疵、而返成其真言密教之良規」と説いた。王は『答顕密教衡疑惑』という記事で教判と空海の教義に関する持松の知識不足を指摘した。

3-4. 中国密教者の試み

1920年代、留日学密僧が相次いで高野山に入った。大勇、持松、又応、顕蔭などいずれも金山から灌頂を受けた、また権田から灌頂を受けたの

は王、曼殊掲諦などである。彼らは組織的な行動ではなく、個人で密教の学習や密教の布教を行っていたのである。それゆえ、彼らの密教理解や密教の思想・主張も千差万別である。彼らは日本から持ち帰った密教を如何に中国にもたらすのかについて各自の主張を述べている。

持松は1928年に発表した『賢密教衡』において、賢密思想つまり賢（首＝華嚴）と密（＝真言）との融合説を説いている。これは、非常に大胆な発想であった。また、華嚴大学で華嚴教学を学び、月霞（1858-1917）から賢首の（華嚴宗）法脈を受け継いだ。後に密教僧になったが、華嚴思想に強く影響を受けている。賢密思想を提唱した直後、王を始めとした密教者からの批判を受けた。『賢密教衡』の中で、華嚴と真言を十方面から比較し、その異同を明らかにした。教相判釈について、真言宗十住心教判を批判して華嚴の小始終頓円という五教教判に偏る態度を示した。空海の「十住心私見」から密教の原意に戻すため、賢密思想を提唱したと『賢密教衡』の文末に述べている。持松は、華嚴経に説かれた法身仏である毘盧遮那如来と、『大日経』・『金剛頂経』の主導である摩訶毘盧遮那如来との関連性を述べ、華嚴教学を用いて密教の理に補うことを主張している。

一方、太虚の弟子である大勇が1923年、高野山で金山から伝法阿闍梨位を得、1924年、北京でチベット仏教ラマ僧白普仁の元でチベット密教を学習した。1925年、ツォンカパ著のチベット語論書『菩提道次第略論（チャンチュブ・ラムリム・チュンワ）』を翻訳し、チベット密教の研究に没頭した。1929年にチベットのカンゼ地区で亡くなった。大勇が東密と藏密を融合して中密を建立することを志したのは、太虚の影響を強く受けたことが主因であると考えられる。さらに顕蔭もチベット密教を取り入れようとした。1924年に出版した仏教雑誌『海潮音（第三期）』に

中国本土各省において、密教が長い間断絶したが、チベット・モンゴルではその伝承がいまだに保たれている。チベット・モンゴルは、皆中国の領土であり、チベット・モンゴルの仏法は皆中国の仏法である。我が漢民族の仏教徒が、もし、チベット・モンゴルの仏

法を持ってその長所を学ぶことができれば、
中華民国五大民族の仏法を統一し、円満させる。
誠に中華仏教の希望である⁶。

と述べている。顕蔭は蒙藏（モンゴルとチベット）を中華民国の領土として捉えチベット密教も中華の密教だと言いながら、チベット密教を取り入れようと主張しており、中華民国の建国理念である五族共和⁷に呼応し、当時の政治に強く影響された主張だと考える。

金山穆韶は持松の師であり、同時に代活躍した大勇、純密、又応、顕蔭諸師も金山の弟子である。金山は古義真言宗の代表的な人物として新義真言宗の権田と共に近代中国における密教復興運動に関わった多くの人物を養成した。1926年に東京で開かれた東亜仏教大会を機に来日した太虚、持松一行は高野山を参拝した。その歓迎式において金山は「弘法大師の仏教観」を発表し、後に『弘法大師の信仰観』に収録された。そこには持松、大勇、純密、顕蔭の来山学密について語られている。さらに持松、大勇、純密の三人について密教教相の点での勉強不足であることが以下のように指摘されている。

先年支那より密林（筆者注：持松）、大勇、純密の三法師が殆んど同時に此の山に来て修學して居られました。當時不肖その指導の任に當たつて居ましたが、三法師に對し密教には事相教相の二門あり、この二門は離るべからざること車の兩輪鳥の双翼の如きものであるから、相並べて修得すべきものなるも、本宗の學徒は最初教相即ち教理を學び後に事相即ち實修門を學修してゐるが、法師等は何れより修得するかと問ひかければ、何れも留學の時期が短いから、事相の方を先づ傳授せられんことを希望しました、さうして教相の方は大體の學修の方針を教へて貰へば自ら研鑽すると申しましたから、直に事相に入ることにして悉曇、眞言、陀羅尼、四度加行、曼荼羅の傳授、諸尊の三密門灌頂等を主として傳授しました。ところが其後支那に刊行せられる海潮音と云ふ雑誌に大勇法師が密

教に關する論文を掲出してゐられるのを見ましたに、どうも弘法大師の教義の眞意をよく意得して居ないものがあることを知り、これ全く留學中教相をよく學修せしめなかつたによるものであると思ひましたが、ちょうど其頃顕蔭法師も留學のためこの山に來られたから、顕蔭法師によく教相の眞意を傳へ、他日歸國の後其旨趣を宣揚せしめたならばよからうと思ひまして、顕蔭法師に努めて教義の要諦を詳説しましたれば、法師もよく其理趣を了得して歸國しましたが、不幸にして法師は歸國後間もなく示寂せられ、余の囑望も水泡に歸しました。法師のことを思へば今もなほ悲嘆の涙に咽ぶ次第であります。⁸

金山の指摘は非常に重要であり、師匠として日本密教の權威的な人物が弟子であり、中国密教者に対する評価が反映される。つまり持松、大勇の密教主張は密教教義の勉強不足と理解されている。当時の中国人仏教者は密教の教義より、その修法儀軌すなわち事相の効験力に傾けることが事実であり、さらに持松、大勇が日本に渡った時の日本語能力が疑われていた。高野山時報によると、持松が初めて高野山に入った時に金山と筆談したという記録が残っている。以上からみれば、持松、大勇は当時密教教義に対する理解が欠けていたことを推測できる。このような状況は単なる持松、大勇だけではなく、当時留日学密僧が密教教理に欠けることはおそらく共通していたであろうと筆者は考える。

以下、持松、王、大勇三人を挙げて彼らの密教に関する師資相承、主張などをまとめる。

表に示した通り、王は真言宗の十住心教判を強く主張し、日本的な密教要素をそのまま取り入れた。彼の主張により当時の中国仏教界に大きな議論が引き起こされた。王は女人成仏をめぐる印光⁹との議論をし、後に僧俗にめぐる議論も行われた。さらに太虚らとの即身成仏や、顕密にめぐる論争をきっかけとして、中国仏教者は密教に対する不信が一気に高まった。1933年に太虚派が創刊した『海潮音』では密教に対する態度が一変

	王弘願 (1876-1937)	釈大勇 (1893-1929)	釈持松 (1894-1972)
流派 (密教)	①新義真言宗伝法院流	①古義真言宗中院流	①古義真言宗中院流 ②古義真言宗三宝院流 ③新義真言宗伝法院流
師事 (密教)	権田雷斧 (1847-1934)	金山穆韶 (1876-1958)	金山穆韶 権田雷斧
密教以外の宗派	なし	臨済宗	臨済宗 華嚴宗
僧俗	在家者	僧侶	僧侶
拠点	広東潮州	なし	江蘇：興福寺 (華嚴) 湖北：宝通寺 (密教) 上海：静安寺 (密教)
東密十住心教判に対して	強く主張	批判態度	強く批判
主な主張	①密教殊勝説 ②僧俗問題における在家者の優位性を主張	①日本、チベットの密教を融合し、中密を建立	前期：①顕密平等 ②華嚴密教 (華嚴寄り) 後期：③チベット密教批判 ④華嚴密教 (密教寄り)

し、密教支持の立場から密教批判になった¹⁰。当時仏教界のリーダーであった太虚からの支持を失い、密教復興運動の全盛期が1932年をもって終わりを告げた。

4. 日本人による「真言宗布教」

4-1. 布教活動概要

近代日本人仏教者の中国布教の中で最も早いのは真宗僧侶小栗栖香頂 (1831-1905) とされる。彼は1873年から中国に渡り、滞在した一年間に中国の各地の寺院を見学し、中国人仏教者と多く交流をした。後に『北京護法論』を著し、中国仏教の現状を詳細に紹介した。

一方、真言宗の僧侶・佐伯覚随は1874年、無許可で中国に渡り、密教の布教活動を始めた。彼は北京を拠点として密教の現世利益を求める歓喜天信仰を広め、多くの中国人信者を得た。さらに「十一面会」を結成して活躍した。こうした小栗栖や佐伯の中国布教は個人行為であり、日本仏教の大規模な布教活動が始まったのは1915年以降である。

1915年に日本は中華民国政府に対して「対華21ヶ条要求」を求めた。その中の第21条「支那における本邦人の布教権を認むること」が当時の中国仏教者に強く批判を引き起こした。同年5月

に袁世凱政権はその要求を受け入れた。それから日本仏教各宗派の中国布教が法的に行われるようになった。以下真言宗各派が中国に設置した別院、布教所のリストである。¹¹

1. 古義真言宗

名称	創設年代	場所
高野山金剛寺	1914	上海
大光寺	1915	山東 青島
大仙寺	1915	山東 済南
金剛寺	1932	天津 日本租界
哈爾濱高野山布教所	1936	ハルビン
北京高野山別院金剛寺	1936	北京
弘法寺	1936	河北 秦皇島
大師寺	1938	天津 日本租界
真言宗開教教務監督所	1938	北京
護国寺	1938	河南 開封
龍禪 (祥) 寺	1938	河南 新郷
姚 (桃) 山寺	1938	河北 石門
長辛寺	1939	河北 宛平
長辛寺	1939	山西太原
南宛寺	1940	河北大興 (現在北京大興)
大興善寺	1940	山東 青島

高野山漢口別院	1940	湖北 漢口
高野山阿弥陀寺	不詳	不詳

2. 新義真言宗智山派

名称	創設年代	場所
新京別院 (満洲国基本道場)	1934	満洲 新京 (現在吉林長春)

3. 新義真言宗豊山派

名称	創設年代	場所
新京開教本部	1938	満洲 新京 (現在吉林長春)

図に示したように、日本真言宗が正式に中国布教を行ったのは1914年に上海に設置された高野山金剛寺である。1940年までに真言宗は、古義新義諸派合計20ヶ寺・布教機構があり、その中11ヶ所が北京周辺の華北地区に位置する。それらの寺院・布教機構の創設年代から見れば1930年代以前に創立されたのはわずか3寺であった。1936年以降寺院数が激増し、1936年から1940年までの4年間に14寺が創設されたことが分かる。その原因を探ってみればやはり当時の戦争や日本政府の政策に関係している。

1926年、真言宗高野派、真言宗御室派、真言宗大覚寺派の三派が合同して古義真言宗を組織した。1927年文部省への古義真言宗の海外及び植民地布教状況報告によれば、樺太で24寺院あり、信者数は10913人に達した、海外で一番の規模であった。続いて朝鮮、満洲、台湾でそれぞれの信者数は4553人、1879人、1641人であった。一方で中国本土、マレー半島、アメリカ本土での信者数はそれぞれ591人、330人、116人しか達していなかった。¹² このデータから見れば日本人が多く移住した樺太や朝鮮、満洲、台湾といった植民地には信者を多く獲得したが、中国、マレー半島、アメリカでの布教は成功とは言えないと考えられる。1930年代以前、日本真言宗の別院、布教所は、主に在華日本人信者のために法要を営まれていたが、1930年代以降、戦争の勃発により、占領地域の民衆に対する布教や従軍布教、軍隊慰問などの需要が生じた¹³。太平洋戦争の勃発に連れて1941年古義真言宗と新義真言宗は強制

に大真言宗あるいは合同真言宗に統合され、敵国降伏祈祷や皇国奉公などの政治的思想教育が主な任務となった。このように1936年以降、中国での布教は一気に強化したと見られる。

しかし、満洲事変、上海事変、日中戦争の勃発に従ってさらに中国人仏教者から敵視され、中国人密教者も真言宗との距離を取るようになった。

4-2. 金山の中国密教観と布教

近年「仏教東漸」という言葉がよく使われる。仏教の伝播は従来、仏教興隆の地から興隆しない地へと伝わるのが一般的な認識である。北伝仏教はインドから西域、西域から中国、そして日本へというルートである。日本仏教の宗派から見れば日蓮宗、浄土真宗以外の法相、律、天台、真言、浄土、臨済、曹洞などのほとんどの宗派は中国から輸入したものである。従って、近代日本仏教の対華布教は必ず中国仏教衰退論という基礎に基づくと筆者は考えている。

近代の日本仏教者は中国仏教をどう見ていたのか、どのように位置付けたのかに関して、日本の仏教者は数多くの著作を残している。比較的早期な資料と言え小栗栖香頂の『北京護法論』があり、密教の分野に関しては、金山穆韶の『弘法大師の信仰観』から窺える。金山は大正15年に日本仏教連合会主催の支那仏教視察団の一員として中国の奉天、北京、天津、南京、蘇州、上海、寧波、普陀山及び杭州などの地を訪問した。そこで中国仏教特に密教の現状やそれに対する見解を述べている。

まず空海が恵果から受法の地・西安の青龍寺に訪れたとき、青龍寺は列祖の遺跡とし、景慕の念を表し、荒廃した青龍寺を見て中国密教の衰退を嘆いた。そして中国仏教の現状について法相、天台、華嚴などの宗派の式微を指摘し、中国仏教の形は殆ど禪宗にして、精神は浄土門であることを述べた。密教の現状についてはまず唐代における密教の興隆を讃嘆し、現在の状況についてこのように語った。

或は準胝陀羅尼、大悲咒、施餓鬼法等の祕密に屬する法の存するより見れば、密教の一法唐代より絶えず相續せしならんかとも思はれ

ざるにはあらざれども、恐らくこれは喇嘛教の種類にして、眞正の密教はその形骸も精神も共に支那に絶え居たる乎。

と中国の密教が完全に断絶していると主張したことが分かる。

一方、当時留日学密僧たちの活動についても言及している。広東の王弘願は権田雷斧の『密教綱要』を翻訳し、中国で密教に対する関心を引き起こしたと述べ、金山の弟子の大勇、持松、純密、顕蔭の活躍についても取り上げた。

最後に金山は如何に日本の真言宗を中国に流布するのかについて以下の三つの方法を打ち出した。

- 一、密教の經典、特に教相に關する書を彼土へ流布すること。
- 二、將來密教の大阿闍梨耶たるに堪へると思はるゝ人物を撰定して、留學せしめ、その留學生に祕密教の道肝を傳ふること。
- 三、日本の密教徒自ら彼土へ渡り、大法を宣布する事。

金山がこの三つの方法の中に最も理想なのは三つ目、日本人密教者が自ら中国に渡り、布教することだと述べた。しかし、結果としては日本人による布教の成果は金山の期待通りにいかなかったと言えよう。

5. 結 論

本稿では中国人密教者による「密教回流」と日本人密教者による「真言宗布教」との二つの方向性で真言宗の伝来について考察しようと試みた。

本論部分は近代中国の密教ブーム、中国人密教者による「密教回流」、日本人による「真言宗布教」の三つの部分に分ける。近代中国の密教ブームでは太虚の密教復興理論について分析し、彼の復興論は密教復興運動の基盤となったことを示した。

第二、中国人密教者による「密教回流」では持松と王弘願を当時中国密教者の代表者として彼らの活動を紹介した。そして王をはじめとする居士

派と太虚の改革派及び持松を代表とする僧伽派の論争について取り上げた。この論争は密教教義だけではなく、僧俗問題、顕密問題についても激しく議論し、太虚をはじめとする改革派は密教支持から反密教立場に変わったのもこの議論と大きく関係している。続いて当時中国人密教者の密教理念も千差万別であった。その中、持松、大勇、王弘願はそれぞれ僧伽派、改革派、居士派の代表的な人物であり、三人の師資相承や密教理念をまとめ述べた。

第三、日本人による「真言宗布教」では日本真言宗の中国布教の拠点や基本状況を紹介した。さらに日本密教者の代表人物として金山穆韶の中国仏教観について紹介し、彼の中国布教に関する理論を述べた。

近代中国に真言宗の伝来に関しては日中両側の捉え方は「回流」と「布教」からある程度反映される。日本真言宗側が布教の目的で中国人求法者に密教を伝えたが、予期の結果をえなかったため、金山を代表とする日本密教者は日本人による直接布教に希望を寄せたのではないかと考える。1930年代に入り、日本真言宗は対華布教を強化したが、日中戦争などの原因であまり効果を得なかった。

一方、中国人密教者の多くは密教を学ぶ前、既に華嚴、天台、法相などの教義について精通し、密教教理に対する理解は疑われる。彼らの密教思想は各自の経歴、学識に大きく影響されている。また、真言密教に対する注目は戦争の勃発やチベット密教ブームの上昇につれて次第に衰えてしまった。1949年以降、密教に関する活動も完全に中止した。歴史から見れば、密教復興は太虚の図られた通りに復興できなかったが、近代中国仏教史において重要な一ページであることは否定できない。その影響が現代の中国仏教にも見られ、民国期に将来した真言宗の事相儀軌が今でも中国の寺院に行われている。さらに王や持松の法脈はその弟子によって今でも伝えており、中国仏教と融合しながら、独自の発展をしている。

近年、中国において、真言宗に対する関心が拡大しており、第二次密教ブームとも呼ばれる。これを今後の課題にしたい。

注

- 1 太虚「整理僧伽制度論」『海潮音文庫』22卷3篇 pp.154-155、原文：唐朝開元四年，善無畏三藏、始將梵筴至長安，譯出密部經論。一行大師盡得其傳。同時、金剛智三藏率弟子不空三藏，亦來東土。案密部由龍猛菩薩 開南天竺鐵塔，禮金剛薩埵；受灌頂儀軌，其法遂行於世。龍猛即以之傳龍智，而金剛智則親承於龍智者也。善無畏亦傳自龍智，而與金剛智、不空、同稱開元三大士。當時君相禮敬如佛，此宗遂如日月經天，江河行地。顧未幾即湮沒。故志磐法師作佛祖統記，已謂唐未亂離，經疏銷毀。今其法盛行於日本。而吾國所謂瑜伽者，但存法事，蓋宋時已成市井歌唄矣。元、明、清朝，其法行於宮掖，然亦承於蒙藏喇嘛，非復開元之舊。唯日本猶存其全法，受而歸之，則此宗可復也。
- 2 1920年太虚によって創刊された仏教総合雑誌。太虚の提唱により20年代末まで密教教義の解釈、日本密教著作の漢訳などの密教関連の文章が幅多く掲載された。1949年以降台湾で刊行し続いている。
- 3 権田雷斧が著した密教の解釈書『密教綱要』が1919年、王弘願によって漢訳され、『密宗綱要』の書名で出版された。『密宗綱要』は初めて日本密教を紹介する著作であり、後の密教復興活動に対する直接な影響を与えた。
- 4 太虚「中国實現密宗復興之趨勢」『海潮音』第6巻第8期
- 5 肖平（2003）『近代中国仏教的復興』広東人民出版社 p.210
- 6 顯蔭「再論真言密教与中華佛法之關係」『海潮音』1924年第3期、pp.27-34、原文：仰又進者、中華本部各省、密教雖久失傳、而蒙藏個部、猶相承未失也。蒙藏皆中華之領土、古蒙藏之佛法、皆中華之佛法也。我漢族佛教徒能汲其長而補其短、以使中華民國五大民族之佛法統一圓滿、是誠中華佛教之光也。
- 7 五族共和とは漢族、満州族、蒙古族、回族（現在の回族ではなくウイグル族など新疆のイスラム系諸民族を指す）およびチベット族の五民族の協調。
- 8 金山穆韶「弘法大師の仏教観」『弘法大師の信仰観』高野山大学出版部、1944年、pp.65-66.
- 9 印光（1862-1940）中国人僧侶、近代中国浄土宗の中興の祖と仰がれる。
- 10 1933年刊行された『海潮音』第14巻第7期において王及び密教に対する批判の文章が多く掲載された。法舫の「護法痛言」、周圓性の「中国佛教密乘危矣」、芝峰の「印度佛教的頽廢時期」、戴季陶の「金剛頂發菩提心論淺略釋敘」などある。
- 11 肖平（2003）『近代中国仏教的復興』広東人民出版社 pp.107-109
- 12 寺河俊海（1970）『真言宗布教史』高野山真言宗布

教研究所 p.97

- 13 小島 勝ら7名（1996）共同研究「第二次世界大戦前の上海における日本社会の宗教と教育（一）」龍谷大学『佛教文化研究所紀要』第35集